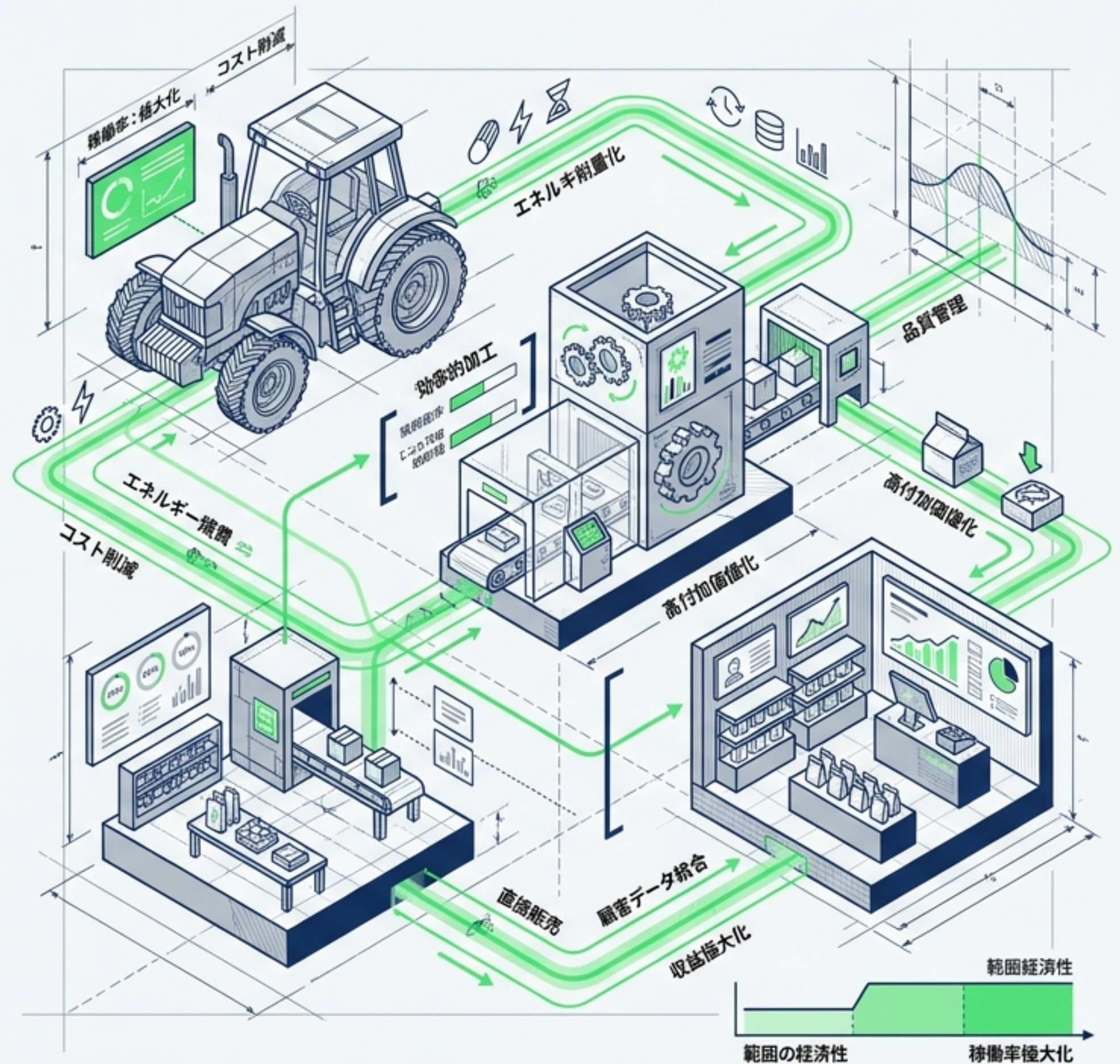


小規模経営体 における6次 産業化の本質

「高付加価値化」の罫を抜け出し、
「範囲の経済性」で稼働率を極大化する

垂直統合による範囲の経済性の発現 ——
2014年からの現場伴走と修士研究に基づく、
これからの農山漁村発イノベーションの指針。

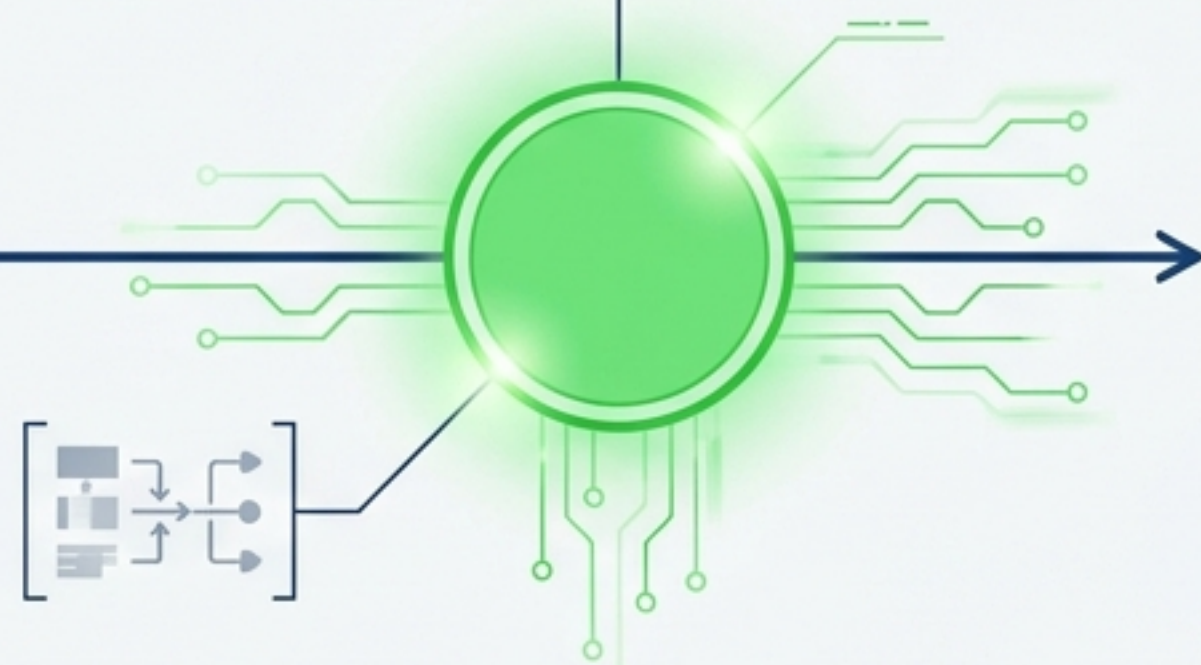


現場での違和感と、国の政策の「発展的解消」

「2014～：県内でプランナーとして活動。
「6次産業化政策の本当の意味合いは何か?」という問いを抱く。」



「現在：修士論文の執筆と同時期に、
国の政策名称から「6次産業」が消滅。」



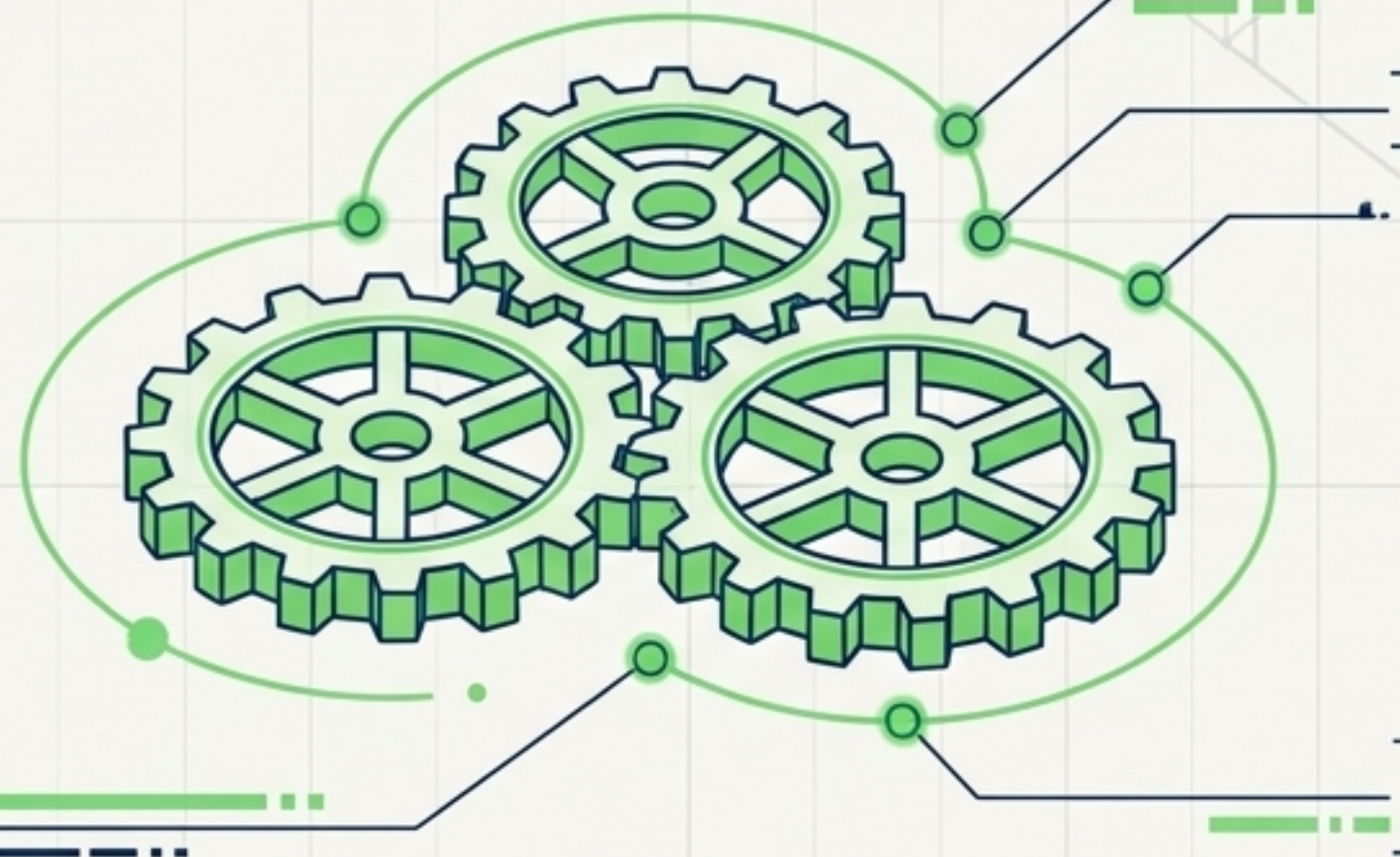
「**農山漁村発イノベーション対策事業**」へと発展的解消を遂げた今こそ、
表面的なキーワードに踊らされない「**本質的な価値**」の再定義が必要です。」

6次産業化の鍵は「高付加価値化」ではない



Old Paradigm

✗ 誤解：高付加価値化（とにかく高く売るための商品開発）



New Paradigm

○ 本質：範囲の経済性（多角化による経営全体の最適化）

小規模経営体において本当に目指すべきは、一部の高級なヒット商品を生むことではありません。経営体としての「基礎体力（収益性）」を底上げする経済理論こそが、6次産業化の真の目的です。

新たな投資ではなく、 既存資源の「使い回し」

範囲の経済性とは —

商品・サービスや事業を多角化することで収益性が高まり、より経済的な事業運営が可能となる経済理論。



個別に新規事業を立ち上げるのではなく、すでにある設備・機械・労働力を複数の事業で共有・活用することで、経営全体のコストパフォーマンスを劇的に改善します。

農業生産活動が抱える最大の弱点：圧倒的な「稼働率の低さ」

INSIGHT

農業生産活動は、その事業特性上、設備や機械、労働力等の経営資源の稼働率が他産業と比較して総じて低くなります。

稼働率

一般的な製造業
(Manufacturing)

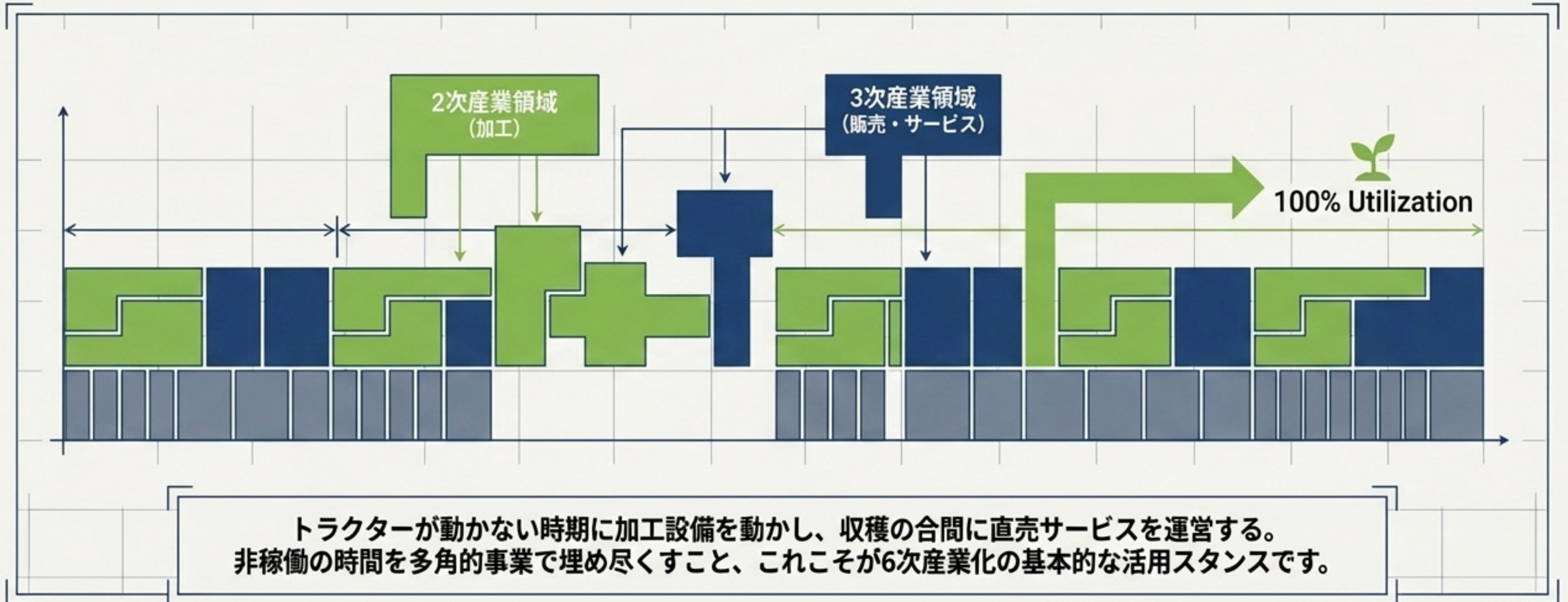
90% Utilization

従来の農業生産
(Agriculture)

天候や季節に依存するため、必然的に発生するこの
「非稼働状態（空き時間）」こそが、経営のボトルネックです。

「垂直統合」による非稼働時間の穴埋め

2次産業・3次産業の活動を加えることの真の目的は、
単なる売上の足し算ではなく、稼働率の改善にあります。

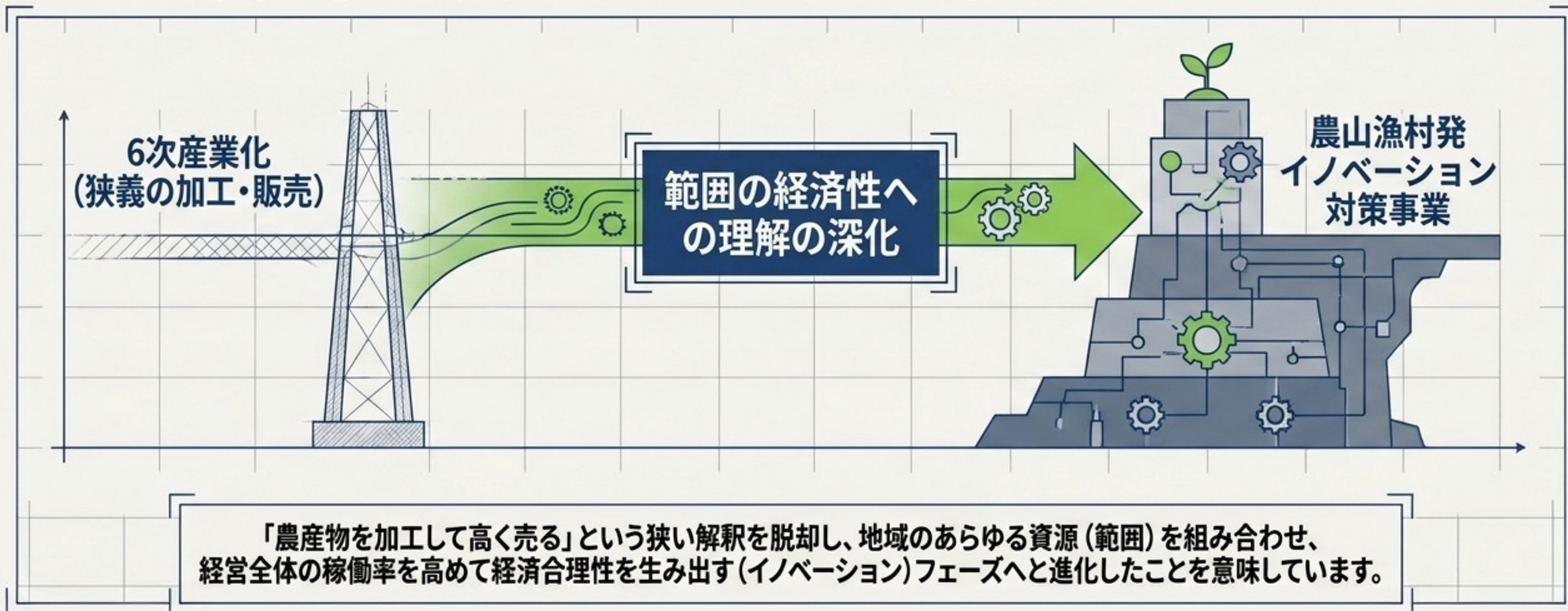


6次産業化のパラダイム・マトリクス

	従来の誤解（高付加価値化）	本質的な価値（範囲の経済性）
主眼	ヒット商品の創出 （高付加価値） 	経営資源の使い倒し （稼働率向上） 
アプローチ	単一商品の単価アップ 	垂直統合（1次+2次+3次） による多角化 
対象となる力	開発力・マーケティング力 	範囲の経済性 （コスト・リソース最適化） 
目指す結果	一部商品の 利益率向上 	経営全体の収益性向上と 経済的な事業運営 

政策の「発展的解消」が意味する次なるフェーズ

「6次産業」というキーワードが消え、「農山漁村発イノベーション対策事業」へと移行したことは、単なる名称変更ではありません。

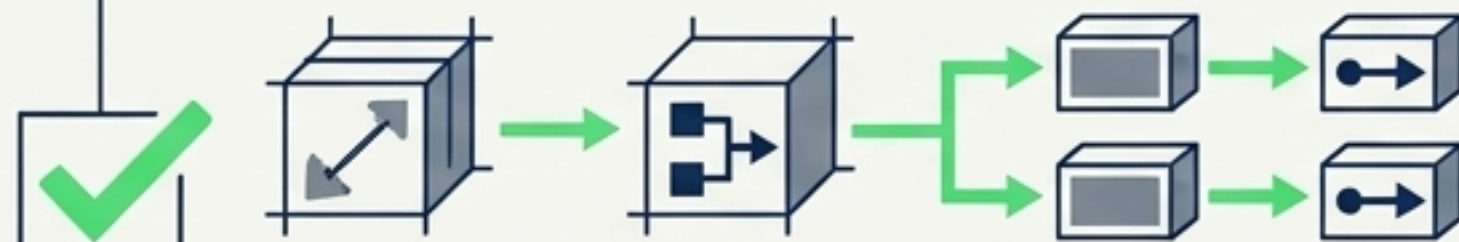


抽象的な理論を、現場の力に。

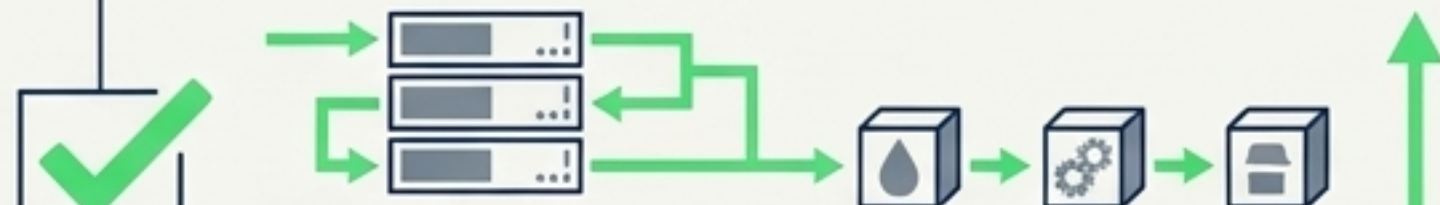
Farm OS



いま、眠っている機械や人材の「非稼働時間」はどこか？



その空き時間を埋めるための「2次・3次活動」は何か？



新たな投資を抑え、既存資源の「稼働率」をどう極大化するか？



6次産業化の本質は「範囲の経済性」の追求にある。
修士論文での探究を経て得たこの本質的な視座を胸に、
現在再び、農業生産者の支援活動の最前線に伴走しています。